

教 仁 名 聞

第67号
(発行日)
2016年4月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

愚 悪 の 凡 夫 と 知 ら さ れ て

親鸞聖人の言葉に「愚悪の衆生」(「信巻」)という言葉があります。聖人は「自分を「愚悪の者」と見ておられたと思います。

そこで「愚悪」ということですが、このお言葉で感じられますことは、まず「自分は愚かである」ということですが、愚かな者であるということとは単に自分は頭が悪くてにぶいということではなく、「愚かゆえに悪をまぬがれない者」と聖人は感じておられたのではないのでしょうか。

愚かということでは聖人は、「善悪のふたつ総じてもつて存知せざるなり」(「歎異抄」)とおっしゃっています。自分分は愚かだから、「何が本当に、善であるか何が悪であるか分からない」と自覚しておられたと伺います。それゆえ聖人は

「如来の御ころによしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、善きを知りたるにてもあらめ、如来の悪しとおぼしめすほどに知りとおした

らばこそ、悪しさを知りたるにてもあらめど」(「歎異抄」)とも仰せになつています。すなわち、「これは善である。これは悪である」と如来様が知りぬかれていくほどに、善悪を見通せる智慧が私にあるかどうか、私は愚かだからとて「何が善であるか悪であるか、分からない。だからどうしても判断をあやまり、いつのまにか悪をなしてしまっている」と聖人は自覚されていたのではないのでしょうか。

あるいは

「是非ならず邪正もわかぬこの身なり」(「自然法爾章」)ともいわれています。「自分は何がよこしまなことであるか、何が正しいことかわからぬ愚かな身」、それだから悪をまぬがれたい者であると思われま

す。上は政治のことから日常生活の事でも、何が善であり悪であるか見定めがつかない。たとえばシリアでのイスラム国というテロ組織に対して、空爆をどんどん行うのがよいのか、行わないのがいいのか、

分らない。行えば罪もない一般民衆がまきぞえになり死傷者が続出する。か

して叱つたらいいのか、ほつておけばいいのか、あるいは逆にほめればいいのか、分からない。

ただ、自分を「愚かな身」と知っているかいないかは決して小さなことではないと思います。自分はいつも正しいと思ひ、自分の決めたことにことさらに固執し、他者の考えを考慮せず自分の考えを絶対化する、自分の判断ミスに鈍感になり無反省になって、周りの人たちに苦しみや害をあたえてしまいます。

それはことに知識人や世の中の指導者が注意しなくてはならないことだと思います。聖人は「自然法爾章」に、そういう世の中の指導者や知識人に対して、自分を含めて、「善悪の字しりがおは、おおらごとのかたちなり」と仰せられています。「俺は善悪をよく知っている」という世の指導的立場の者のごう慢さが自からの判断を絶対化し、他の意見に耳を傾けず、つっぱしって、いかに社会に大きな害をもたらしたか、近代の歴史をみれば一目瞭然です。

「自分は愚かな者であると、自分の姿を知る」ことは大事なことだと思います。(了)

安楽国をねがうひと

(和讃講話)

安楽国をねがうひと

正定聚にこそ住すなれ
邪定不定聚くになし
諸仏讚嘆したまえり

『浄土和讃』

現代語訳（本願を信じお浄土である安楽国に生まれようと願う人は、この世にいる間から正定聚という、必ず仏のさとりを開くことに定まった人びとの仲間に入っているのである。自らなす諸の善や修行によって往生を願う邪定聚の人や、自らが行じる称名行の功德によって生まれようと願う不定聚の人は、真実の浄土には往生していない。諸仏は、本願の念仏を信じるばかりで正定聚に住し真実の浄土に生まれることをほめ讃えられた）

N 「《安楽国をねがうひと 正定聚にこそ住すなれ》とは」
D 「安楽国とは阿弥陀仏のお浄土のことです。善知識の説

法を通して、〈煩惱だらけの汝

を、そのままなりで浄土に生まれさせる〉との阿弥陀仏の仰せを聞き、〈ああ有難い、そういうことでしたらどうぞ浄土に生まれさせて下さいませ〉と、底抜けの大悲に圧倒されて、自分の心の善し悪しをかえりみず、仰せのままに信順している人は、不思議な弥陀のお助けをそのまま受けいれたその時からこの世において〈正定聚〉という境界に入っている人であり、その人はこの世の生涯を終えると安楽国へ生まれる、と仰せられます

N 「正定聚とは」
D 「まさしく浄土に生まれることの定まった方たちの仲間（聚）ということですよ」

N 「では、《邪定・不定聚くになし》とは」
D 「浄土には、邪定聚や不定聚の者は生まれませんから、浄土にはおられないということですよ。この世で阿弥陀仏をたのみず、自分の力（自分の心

や知性や自らの善行など）をたのみにして、人は浄土に生まれることができない、そういう者たちのことを邪定聚といわれています」

N 「では不定聚とは」

D 「我が名を称えるばかりで助ける、その外になにもいらぬぞ」という阿弥陀仏の（まゐるだけ）の大悲の誓約を聞いて、有難いと思ってお念仏を称えるようにはなるのですが、〈まるだすけの大悲のお心〉がいまだ知られず、称えて助かるうとか、称えたら助けて下さるとか、称えていけばいいつかは助けられると受けとって、今この私をまるまる引き受けて下さる大悲のおぼしめしがいただけず、如来様の大悲が届かないから、信心が決定しないで往生が定まらない方たちのことですよ」

N 「なぜ、正定聚とか不定聚とか邪定聚とかが説かれるのですか」
D 「それは、お念仏の教えを聞いて念仏していても、自分の能力や知性や心をアテにして、お助けの道に惑うことが多い私たちに、〈こっちはいつたら迷うよ〉〈そっちはいくと道をみようしなうよ〉〈そういう受けとり方はまちがいですよ〉

と教え導かれるためです。迷う道はいくらでもあります。助かる道は一つです。それは仏陀・善知識に正確に教えてもらわないと分からないものです」

N 「たとえばどんな道が迷いの道ですか」

D 「仏様に向かって、病気が治りますようにとか、商売が繁盛しますようにとか、子どもが試験がパスしますようにとか、そのような自分本位の祈願が中心になると、仏様にお参りをしていても、それは自分の願望や欲望をかなえてもらいたいという私（自我）中心の思いにとどまっていますから、そこには本当の安心も安定もありません。自分の願望が叶うように仏様に祈るのですが、それは自分がどんな状態になっているのかわかっていないのです。ですから、いつまでたっても私中心の立場から離れることができないのです。そこで仏の教えをよく聞いて自分のあやまりを知らせていただくことが大事になります」

N 「他には」
D 「たとえば、仏教の教えを聞くようになりましても、自分の学んだ仏教の知識をアテ

にしたり、自分の考えなどをたのみにしてしまいます。自分の心がいかにかたのみならず、自分の思案では助からないうという、そのことが分からずに、いつまでも自分の心によりかかって、阿弥陀仏が（助ける。南無阿弥陀仏）と喚びかけたもうている仰せにおまかせできないでいます。そういうように自分を信頼して阿弥陀仏（本願力）を信頼しな

いかぎり、浄土には生まれられない。それは邪定聚や不定聚にいる状態なのですと、教えて下さるのです」
N 「他には」
D 「真宗の教えを聞き、自分の考えや思いや行いでもって助からない、浄土に生まれることはできないと知る。こんなどうしてみようもない私にたいして阿弥陀仏が（そのままなりを引き受ける）との驚くべき大悲をかけて下さっている。それを聞いて、もう私にはお念仏一つしかないと思つて、ナムアマダブツ、ナムアマダブツと称える一つの身になるのです。しかしなお自分の称え心や称えている念仏行の功德をあてにしてしま

います。どうかすると、称えていけばいつかは助けて下さると受けとって、称える行為

をあてにして、今ここで阿弥陀仏におまかせすることがない。いわば如来様のご恩一つで助かることに気がつかないのです」

N 「そういう状態の人を不定聚というのですか」

D 「ええそうです。いまだ往生が定まらない、そういう人たちのことをいいます。このように、どこまでも自分の側のみをながめて、阿弥陀仏の本願を信頼しないので、いつまでたっても阿弥陀仏とのあいがおとずれず、お念仏を称えていても満足できないのです。そういう状態の自分の姿は自分ではとても分かりませんが、聖人は私たちのあやまりをお示し下さって、〈そんなところでうろろろせずに、そのままなりで阿弥陀様に引き受けていただきなさい〉とお勧め下さるのです」

N 「お念仏一つがよりどころであるといっても、なお自分をたのみにする自力の心がこびりついていて、阿弥陀仏をたのまないのですね。ほんとうに自力の執心はしぶといですね。ではどうしたら自力の心を離れることができるのですか」

D 「自力の心を自分で離れる

ことはできません」

N 「ならばどうしたらいいのですか」

D 「どうもできません。どうしたらうまくいくというようなものはありません。とにかくどうにもならないです。けれども自力ではどうにもならないことを本当にどうにもならないと知るので。だいたい〈どうしたら〉と尋ねていることがいまだに自分で行かなくとも思っている証拠です」

N 「自分ではどうにもこうにもならないにもかかわらず、どうにかしようとしてきた。それで今も自力の心がありませんが、どうにもならない私と知るのでですか？」

D 「ええ、どうにも自分の知性や心を頼みにする自己信頼の心を離れることも取り除くこともできない私。そんな私を私と知ることです。まったく自力の心を取り除くことができない、どうにも助からぬ私だ、と自分の本質をそのとおりに認めることです」

N 「自力いっばいの心の私、この自己信頼の心を取り除くことができない私と知るのですね」

D 「ええそうです。ですが〈知りなさい〉というとまた〈知り

りにかかり、知ってお助けにあずかりたい〉と知ることには力を入れようとします。知って助けていただくとうと計らうのです。そうでなくて、ただ仰せのままに聞くばかりです。とうてい浄土には生まれることはできない、できないどころか、悪道にせずむよりほかない私と聞くばかりです」

N 「知ればどうなるのですか」

D 「知ってどうなるわけでもありません。知っても知らなくともどうしてみようもない私のままです。それが私の本質です。それをそうと聞くばかりです」

N 「本当にどうにもならぬ私ではない。ここから出れないのですね」

D 「ええそうです。そんなあなたに南無阿弥陀仏がどう仰せられていますか。それを聞くのです。口にお念仏となつて現れて下さる南無阿弥陀仏はどうおっしゃっているのか、これを聞くのです。お助けはすでにここに来ているのです」

N 「これまでお聞きしてますと、正定聚ということは大事なことなのですね」

D 「ええ。人生上のできごととはみな流れ去っていきます。全て過去へ過去へと過ぎ去っ

ていきます。この世も私の心

も私の身体の状態も、みな変わりづめです。昔、名師といわれたお方にある人が〈先生お変わりありませんか〉とおたずねしたら、先生曰わく〈変わりどうしじや〉と。実際そうではありませんか。人生に変わらぬ確かなものはどこにありますか。それがなくては空しいものです」

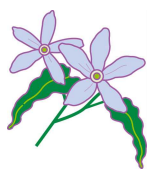
N 「それと正定聚とどういう関係がありますか」

D 「今回は詳しくは申し上げられませんが、もはや流れ去らない真実にまさしく立ち位置が定められる、それが正定聚のすがたといってもいいのでしょうか」

(了)

〈遠方法話予定〉

- * 四月十日〜十一日。広島市安芸区。龍善寺。午後より午後まで。
 - * 五月四日。姫路市。西源寺。午後。
 - * 五月十九日〜二十一日。福井別院。朝事後法話と午後法話・座談
 - * 五月二十三日。名古屋別院。午前十時法話・午後座談。
 - * 六月四日。福井別院。午前十時法話・午後座談
 - * 七月九日。福井別院。午前十時法話・午後座談
 - * 七月十四日〜十五日。石川県鳳珠郡穴水町。法琳寺。午後より午後まで。
 - * 九月四日。岩手県釜石市。寶樹寺。午前十時より正午まで。
 - * 十月十三日〜十五日。福井別院。朝事後法話と午後法話・座談
 - * 十月二十三日〜二十五日。札幌別院。
 - * 十一月二十三日から二十四日。石川県金沢市。名声寺。午後から午後まで。
 - * 十二月十日から十一日。姫路市。西源寺。夕刻から午後まで。
- 詳しくは念仏寺にお尋ね下さい。



《念佛寺永代経法要》

四月二十二日 (金)

午後二時始

法話 丸山 顕子 先生

(以前NHKラジオで先生の歩みが放送されました)

* 同日 (四月二十二日) 午前十時・勤行法話

(念佛寺住職の法話です)

松並松五郎師のことども

②

から少し離れている松並先生の念仏堂をそれこそたまたま見つけ、それが縁で

小生が十八才の時に、松並師に初めてお会いして、2、3回松並師の居られた念仏堂に寄せていただいたように思います。その後ずっと無沙汰をしていますが、大学卒業後しばらくして、一度師が働いておられた職場にお訪ねしたことがあります。それ以後も師を訪ねることはありませんでした。昭和六十年(四十才)に兵庫県尼崎市西難波町に一軒屋を借りて、「西難波念仏草庵」という小さな看板を掛けての生活を

松並師のご法縁を深く結ぶことができたのは本当に不思議です。お念仏を求め、心を寄せていますと、不思議ですがお念仏に導かれ、あうべき人にあい、聞くべきお話を聞かせいただくのだということ。それはまさに仏様のお導きが深く厚くかかってくるのだということを実感します。阿弥陀様の不思議なおはからいがあるのですね。もちろん、これだけではありません。

「釈迦弥陀は慈悲の父母
種種に善巧方便し
われらが無上の信心を
発起せしめたまいけり」

しはじめて間もなく、家族四人で奈良の明日香村に遊びに行きました。駅前で自転車を借り飛鳥時代の様々な遺跡や遺物を訪ねて、帰路大回りをして自転車で行った。以前に来たような光景の通りに出ました。「ああこは、以前来たことがある。そうだ松並先生のお宅のあるあたりだ」と

と『ご和讃』にあるごとく、種々さまざまな不思議なお手だてやご縁をいただいて、仏法の世界に帰入せしめられるのですね。「如来まします」ということはこれだけでも言えることです。親鸞聖人は現実の人生生活の中で阿弥陀仏や観音菩薩あるいは勢至菩薩のお導き、いわば「如来のおんはからい」を深く感じておられたと思います。

中に通されて少し仏法のお話をお聞かせいただきました。そのお話がやはり徹底していて、感動し、これは何度もお話をお聞かせただかねばならないと思つて家路につきました。その後十年間ほぼ毎月一回兵庫県から奈良まで二時間かけて通いました。念仏堂ではいつも二時間近く一対一のお話を聞かせていただきましたが、さまざまに質問もさせていただきましたが、これは本当に有り難かったです。

お念仏を申しつつ聞法して下さい。そうするとお念仏のお導きの働きが加えられて、さまざまに仏縁に恵まれ、おのずと仏法の中に入らせていただきますよ」と申しあげるので。仏縁だけでなくて生計上の便宜にも働いて下さると感じています。なかなか信じてもらえませんが。

今から思いますと、たまたま明日香村に観光気分で行ったことが縁で、明日香村

松並師が「求道心が乏しいから仏法がいただけませんと言つて嘆くが、お念仏を申している、求道心の弱い私をお念仏の方が私を引っ張つて下さつて仏法に入れて下

さる。だから嘆くひまがあつたらお念仏申し、お念仏を聞きなさい」とのお話しをお聞きしたことがあります。

念仏堂は玄關を上がると正面に南無阿弥陀仏の掛け軸が掛けてあり、その前に香炉が置いてあるだけの部屋とその両脇に部屋があります。裏にも部屋がありました。部屋には何のかざりもなく、まったく簡素でした。とにかくお念仏以外の一切のものは省かれているという感じでした。念佛堂は村の念仏者が共に力を合わせて建てられたもので、松並さんが懇志を集めてできたものではありませんでした。念佛堂では毎月日曜日に、村の内外の念仏者が集まつてお念仏を相続されました。机をかこんで坐り、真ん中に香炉を置いて、線香一本に火をつけて立て、線香が燃え尽きるまでお念仏を称えるだけの相続です。松並さんが敢えて法話をすると言うことはなく、尋ねられたらお応えするという風でした。私はその念仏会へは一度しか行つたことはありませんでした。詳しいことは分かりませんが、そのお念仏も、称えることに中心をおくのではなく「お念仏を聞く」という相続だったことはまちがいありません。なぜならお念仏そのものが阿弥陀仏の直説法ですから、称えているお念仏を聞くままが説法を聞いている、そういう聞名念仏相続だったと思います。(続く)

《任職雑感》

この三月五日、木村無相さんの三十三回忌が福井県越前市の和上苑で行われました。藤枝宏壽師が発起人となり、午後一時から加茂淳光師の導師のもと、参加者全員(一三〇名ほど)で正信偈の繰り読みの勤

行。無相さんの生涯についてのDVDを見て、休憩後、本願寺派僧侶一名・大谷派僧侶(二名)他の派一名の若手僧侶による説法がなされました。説法は無相さんの「念仏詩抄」の中で感銘したものを拾い上げての法話でした。同じ真宗でも派が違えば説法の色合いが違うことを実感しました。若い方は無相さんにはお会いしたことがない中で、無相さんの言葉に触れて下さったことは有難いことでした。その後、小生と法岡師と他一名の短い感話で終了しました。

無相さんは五十七才から東本願寺の同朋会館の門衛をされ、やめられてからは福井県に移られて老人ホームへ入られて一生を過ごされました。その間に『念仏詩抄』を出版され、それがいろいろな人の目にとまるようになったこと。また花田正夫師の発行されていた『慈光』紙に毎月お念仏の味わいの詩を載せられたことなどが縁となつて、NHKの金光さんの目にとまったのでしようか、無相さんのお話しがNHKラジオオで二回放送されました。ようやく人に無相さんの存在が知られるようになってきたのは、七十才後半だったと思います。それまでは東本願寺に十二年間も勤められましたが、一人のただの信者さんというだけのお方と見られていたと思います。無相さんご往生後すでに九十二年にもなりますが、この度の三十三回忌に百名以上の方々がお集まりになったことは無相さんのお言葉や生前の聞法のお姿が静かに広く浸透していったのだと思います。無相さんの聞法はとにかく「自分一人の上にひたすら真宗を聞く」ということに徹していて、念仏の信心が自分の身に実感となるまで、ごまかさず妥協せず、お念仏を称えつつ聞き聞きし、信心の語録に尋ね尋ねしていく、そういう姿勢を貫かれました。(了)